

住居観に関する研究

Studies on the View of Dwelling House and Home Life

その 1. 住意識の構造分析

Part 1. The Structure of Various Consciousness for Dwelling House and Home Life

中 島 喜代子

1. はじめに

欧米の先進国に較べ、我国において一番立ち遅れている部分として、常に引き合いに出されるのが、住宅および住環境の問題である。この劣悪な状態を引き起こす原因について、種々の指摘がされているが、その大きな原因の一つが、居住者の住居観である。空間的に余裕のある住宅における一室集中就寝や、食寝未分離等の住み方の矛盾を生み出したり、矛盾のある住み方を余儀なくさせる住空間に対しての住要求を潜在化させ、あるいは、社会的政策要求の高揚を妨げる住意識に対する精神構造上の潜在的基盤となるのが住居観である。同様に、同一社会階層における住宅選択の多様性や、同一空間条件、同一家族条件のもとでの住み方の多様性も住居観に起因すると考えられる。

ところで、研究者や為政者が、住政策を立案したり、住空間の設計計画を行う場合、居住者の住意見をベースに敷くことを前提としている。しかし、為政者や企業が行う設計計画は、多くの場合、主目的は居住者の住意見ではなく、企業や行政の意向で行なわれることがほとんどである。本研究の課題は、居住者側からの住意見を住政策、住空間の設計計画に反映すること、さらに、住居観の形成、変容の要因を探ることにより、住教育に役立てるための知見を得ることにある。

今日まで、この立場からの住意識に対する研究は数多く行なわれているが、その大部分は、個々の住現象に対する住意見の採集にとどまっており、居住者の住意識の全体像を把握するにいたっていない。そのため、複雑な住意識のメカニズムの解明にはあまり手をつけられておらず、企業が行っている個別商品自体の研究から離脱したライフスタイル研究の隆盛とは大きな隔りがある。

本報は、住居観を類型として把握することから出発し、住意識構造の解明に一つのアプローチをしようとするものである。

まず、住意識に関する調査を行い、統計処理により住居観パターンを抽出し、各住居観パターンにおける住意識の性格分析を行う。次に、住意識構造の一側面として、住意識における欲求性向と社会性向の関連について分析する。さらに、住居観が、個々の住意識に影響を与える潜在的な精神基盤であることの証左として、住評価の意識構造との関連についても分析する。

2. 調査方法と調査対象の概要

2-1. 調査の概要

調査対象は、愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウン居住者とした。ここを調査対象としたのは、住生活、住意識に与える住居観の影響をより明確に把握するために、同一空間条件の相当な数の標本が得られること、および住宅階層の異なる比較サンプルとして、一戸建の宅地分譲住宅が存在することによる。高蔵寺ニュータウンは、岩成台、中央台、藤山台、高森台、石尾台、押沢台、高座台の7つの団地で構成されている。その中で、集合住宅は、3DKタイプの公団分譲住宅を、その型の竣工時期に近い藤山台、中央台、岩成台から、1000戸選択し、宅地分譲一戸建住宅（以後戸建住宅と略す）は、その全住宅855戸を対象とした。

調査は、昭和56年7月26日から8月1日にかけて行ない、調査方法は、アンケート用紙を各戸に直接配布し、3日後に回収する留置き式のアンケート調査とした。その結果、表1に示すように、集合住宅384軒、戸建住宅434軒、計818軒の有効標本数を得た。

表1. 調査の概要

種 別	調 査 対 象 数	配 布 数	配 布 不 能 数		回 収 数	有 効 標 本 数	回 収 率	有 効 標 本 率
			拒 否	留 守・空 室				
戸 建 住 宅	855(軒)	559(軒)	113(軒)	183(軒)	486(軒)	434(軒)	86.9(%)	89.3(%)
集 合 住 宅	1000	525	156	319	483	384	92.0	79.5
藤 山 台	610	364	93	153	332	261	91.2	78.6
中 央 台	220	90	31	99	82	66	91.1	80.5
岩 成 台	170	71	32	67	69	57	97.2	82.6
全 体	1855(軒)	1084(軒)	269(軒)	502(軒)	969(軒)	818(軒)	89.4(%)	84.4(%)

2-2. 調査対象の概要

調査対象として、住宅階層が異なる集合住宅と戸建住宅の2種類のサンプルをとりあげたが、図1～図8に示すように、両者は社会階層、家族の人的条件自体も、まったく異なったものである。

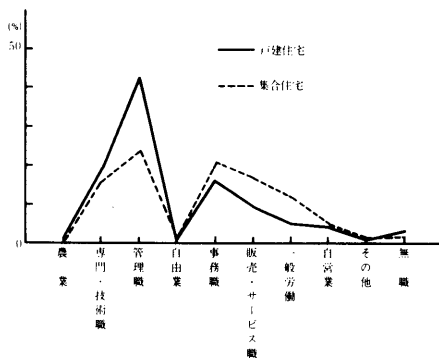


図-1 戸建、集合住宅別夫の職業

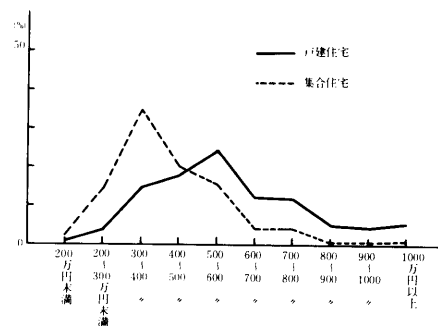


図-2 戸建、集合住宅別、世帯年収

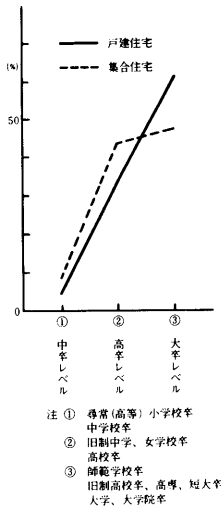


図-3 戸建、集合住宅別
夫学歴

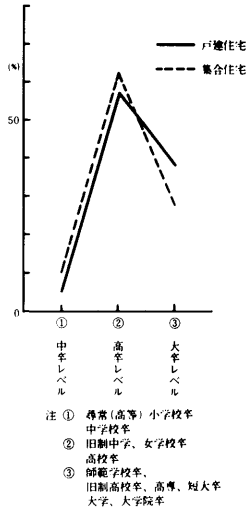


図-4 戸建、集合住宅別
妻学歴

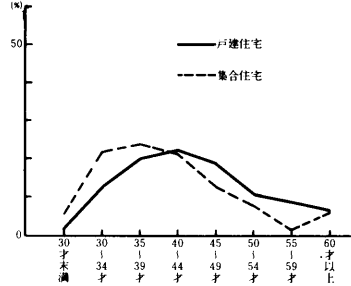


図-5 戸建、集合住宅別夫の年齢

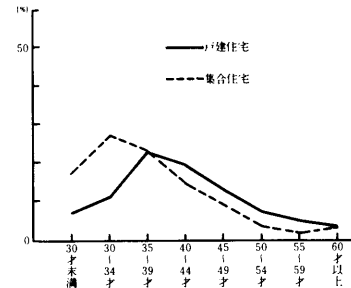


図-6 戸建、集合住宅別妻の年齢

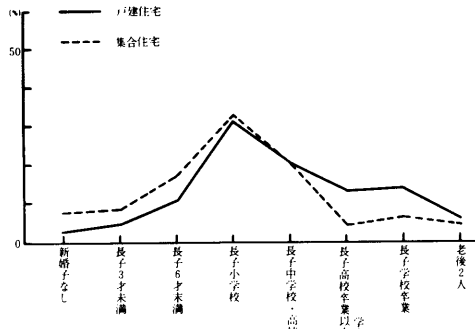


図-8 戸建、集合住宅別家族周期

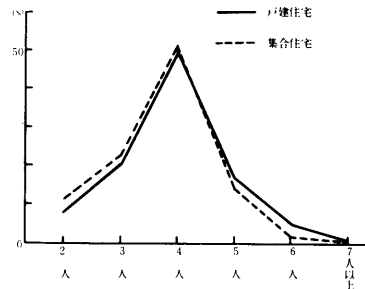


図-7 戸建、集合住宅別家族人数

まず、夫の職業は、戸建住宅では管理職が多く、集合住宅では、事務職、販売・サービス職、一般労働が多くなっている。世帯年収でも、戸建住宅は多い方に、集合住宅では少ない方に片寄っている。夫と妻の最終学歴においても、戸建住宅で高いレベルを示している。このように、社会階層構成要件である、世帯主職業、世帯収入、夫婦学歴とも顕著な高低差がみられ、社会階層の違いを示した。

次に、家族の人的条件についてみると、夫と妻の平均年齢は、戸建住宅では44.5才と40.6才、集合住宅では40.5才と37.1才であり、両者に3才～4才の開きがみられる。家族人数においても、平均家族人員は、戸建住宅で3.93人、集合住宅で3.72人と戸建住宅で多く、家族周期段階も、戸建住宅で高くなっている。また、家族型も直系および複合家族の割合が、戸建住宅で13.4%、集合住宅で3.8%と違いを示している。

3. 住居観型の仮説設定と住居観パターンの抽出

3-1. 住居観に関する用語の定義と住居観型の仮説設定

前述したように、これまでの住居観（住意識）に関する研究では、住居観（住意識）をパターンとしてとらえるものはほとんどない。また、住居観型（住意識型）を設定する研究においても、それまでの研究の積み重ねから感覚的に導き出された型分類の域を出ていない。そのため、その実証的研究は充分でなく、仮説設定の段階であるといえよう。^{注(1)} 本研究では、Q技法因子分析によって、実際の住居観パターンを抽出することとした。また、住居観に関する用語は統一した使い方がされておらず、厳密に用いられているとはいえない。そこで、まず本研究で用いる用語の整理と定義を行う。

住居観とは、「住」の現象をチェックボードとして、その応答としての住意識を引き起こす精神構造上の潜在的基盤ととらえる。また、住意識とは、住要求、住評価、住意見、住理想などの、言語的表現を含む顕在化された意識を指す。住要求、住評価は、本人と直接利害関係をもつ住現象についての応答であり、住意見、住理想は本人と直接利害関係をもたない、仮定的な住現象に対する客観的立場での応答であると考えられる。

次に、居住者の現実の住居観パターンを考察するため、表2に示す住居観型の仮説を設定した。これは、価値意識の類型軸を無指向性、斬新性、機能的合理性、個性的主体性、社会的連帯性

表2. 住居観型の仮説

価値意識類型軸 肯定・否定軸	無指向性	更新性	機能的合理性	個性的主体性	社会的連帯性
肯定 否定	無指向型	斬新型 旧態維持型	合理型 非合理型	自律型 他律型	社会型 非社会型

的連帯性の軸でとらえたものである。この軸とそれに対する肯定と否定の組み合わせにより、9種類の住居観型を設定した。各住居観型に対応する住意見項目1～2個、計16個を用いて、居住者の住居観パターンの抽出を行なった。これは、住意識の潜在的精神基盤である住居観型を知るためには、最もその住居観の特徴を示すような住意識を用いて、それを類推するという方法をとらざるをえないからである。その際、それぞれの型は、これまで使われている住居観型の名称、^{注(2)}あるいはより特徴を容易に理解しうる名称にして示した。また、〈無指向型（ねぐら型）〉を除く各住居観型の項目については、個人的欲求の表現（……したい）と、社会的規範の表現（……すべき）の二通り設定した。各住居観型の性格と質問項目を次に示す。

表3. 住居観パターン抽出のための注意見項目

1	ア、便利そうな道具（電気製品など）が新発売されると使つてためしたい。（あたりしがり型） イ、便利そうな道具（電気製品など）が新発売されると使つてためすべきだ。〈新製品〉
2	ア、冠婚葬祭の行事に困らないように続き部屋を持ちたい。（しきたり型） イ、冠婚葬祭の行事に困らないように続き部屋を持つべきだ。〈つづきま〉
3	ア、家を建てる場合には、家相を重視したい。（しきたり型） イ、家を建てる場合には、家相を重視すべきだ。〈家相〉
4	ア、住宅はあまり広いものより、必要な部屋だけにしたい。（合理型） イ、住宅はあまり広いものより、必要な部屋だけにすべきだ。〈必要室〉
5	ア、人の目につく玄関や居間は、豪華にしたい。（みせびらかし型） イ、人の目につく玄関や居間は、豪華にすべきだ。〈玄関〉
6	ア、たとえ資金にあまり余裕がなくても、住宅や家具は自分の個性にあったものを選びたい。（自律型） イ、たとえ資金にあまり余裕がなくても、住宅や家具は自分の個性にあったものを選ぶべきだ。〈個性〉
7	ア、他人のうわさなどを気にせず、住宅や住み方について改善すべきことがあったら何でも実行したい。（自律型） イ、他人のうわさなどを気にせず、住宅や住み方について改善すべきことがあったら何でも実行すべきだ。〈うわさ〉
8	ア、環境問題や公害問題に常に関心を持ち、改善のために働きかけたい。（社会性重視型） イ、環境問題や公害問題に常に関心を持ち、改善のために働きかけるべきだ。〈環境問題〉
9	ア、持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やしてほしい。（社会性重視型） イ、持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やすべきだ。〈公営住宅〉
10	ア、住宅は、近所とのつりあいのとれたものにしたい。（うちでも型） イ、住宅は、近所とのつりあいのとれたものにすべきだ。〈つりあい〉
11	ア、資金に余裕があれば、有名な建築家に依頼し、設計をすべて任せたい。（みせびらかし型） イ、資金に余裕があれば、有名な建築家に依頼し、設計をすべて任せるべきだ。〈建築家〉
12	ア、客は居間を通して家族全員でもてなしたい。（マイホーム主義型） イ、客は居間を通して家族全員でもてなすべきだ。〈居間接客〉
13	ア、マイカー利用者が多くて、電車やバスなどの公共輸送機関が廃止されようとも、自分としてはいつでも利用できるマイカーを持ちたい。（マイホーム主義型） イ、マイカー利用者が多くて、電車やバスなどの公共輸送機関が廃止されようとも、いつでも利用できるマイカーを持つべきだ。〈マイカー〉
14	ア、家具や電気製品を買うときには、知人や友人の購入したものを重視したり、家族に選択をまかせたい。（うちでも型） イ、家具や電気製品を買うときには、知人や友人の購入したものを重視したり、家族に選択をまかせるべきだ。〈購入〉
15	ア、住宅は住むための道具であるから、できるだけむだな装飾やぜいたくな材料は使いたくない。（合理型） イ、住宅は住むための道具であるから、できるだけむだな装飾やぜいたくな材料は使うべきでない。〈装飾不要〉
16	住宅は、雨露をしのげさえすればよい。（ねぐら型）〈雨露〉

(注) : () 内は住居観型名
 < > 内は項目の略省名
 以下この略省名を用いる

- ①ねぐら型（無指向型）……「住」に関する価値意識に一定の方向性のない型。この型は、すまいは雨露がしのげさえすればよいとする考え方として表現した。
- ②しきたり型（旧態維持型）……「住」に関する古い慣習にとらわれており、旧来のしきたりを守り続けようとする封建性の強い型である。ここでは、冠婚葬祭などの行事のためのつづきま重視志向と、家相重視志向の二方面でとらえた。
- ③みせびらかし型（非合理型）……「住」に関して、対外的な面を強く意識し、住空間形成

についても、万事そのことを第一に考えていく型。ここでは、玄関・居間という対外性の強い空間への重視傾向と、有名建築家にすべてまかせるという対外評価第一主義の側面をとりあげた。

④うちでも型（他律型）……「住」に関して、「よそがやるから、うちでも」というように、自分の主体性、個性をもたず、囲りの動勢を第一に考えて、それに従う型。流行追随型である。ここでは、他との異質性を特に避けようとし、つりあいを重視して考える側面と、物品の購入に際して他に選択を依存する側面をとりあげた。

⑤ あたらしがり型（斬新型）……新しい傾向をすべて良として、流行に従って卒先して次々と変わっていく流動的な型。流行先取型である。ここでは、新製品に対する対応の側面をとりあげた。

⑥ マイホーム主義型（非社会型）……「住」に関し、自分の家庭生活を第一とし、家庭内では住生活を楽しむことを主とするが、社会的視点をもたない型。ここでは、居間で家族そろって接客する、家庭内楽しみ傾向の側面と、社会的なことよりも個人の家庭の利便性を求める側面をとりあげた。

⑦ 合理型……「住」に関して、その機能的合理性を第一とし、他の側面については、合理的に割り切って処理する型。ここでは、住居の広さに関する側面と、意匠デザインの側面をとりあげた。

⑧ 自律型……「住」に関して、他人のこと、世の中の流れをまったく気にせず、自分の個性、主体性を第一に考える型。ここでは、個性を重視する側面と、他からのうわさに対し、主体性をもって臨む側面とをとりあげた。

⑨ 社会性重視型（社会型）……「住」に関して、自分の家庭生活を地域社会との関連の中でとらえ、「住」の社会的側面を重視する型。ここでは、住宅供給面での公的側面と、住空間を単体の住宅としてだけでなく、地域環境まで広げてとらえる側面をとりあげた。表3に調査項目全文を示す。

3-2. 住居観パターンの抽出

住居観パターンを抽出するための統計手法は幾つか存在するが、本報では、Qモード因子分析を用いることにした。住意見16項目の質問形式は、5段階評価とし、思うを5点、やや思うを4点、なんともいえないを3点、あまり思わないを2点、思わないを1点と点数を与え、データとした。また、無回答には、平均点に一番近い整数の値を代入した。クラスターの個数抽出段階は、各々のクラスターが約10%程度以上の構成比を占めることを基準としたところ、4軸の段階でその条件が満たされた。各居住者個人が属するクラスターは、4本軸の因子得点の中で、絶対値の一番高い軸に分類した。その結果表4に示すような結果が得られた（ここでは、欲求性向の16項目によるクラスターを扱っている）。

表4. 住居観パターンの抽出結果（欲求性向項目による）

	第1軸 実数 (%)	第2軸 実数 (%)	第3軸 実数 (%)	第4軸 実数 (%)	全 体 実数 (%)
集合住宅	129 (33.6)	146 (38.0)	61 (15.9)	48 (12.5)	384 (100.0)
戸建住宅	166 (38.2)	114 (26.3)	91 (21.0)	63 (14.5)	434 (100.0)
全 体	295 (36.1)	260 (31.8)	152 (18.6)	111 (13.6)	818 (100.0)

3-3. 住居観パターンの性格分析

Qモード因子分析の結果得られた、変数の因子得点は、表5のようになった。第1軸は、

表5. 変数の因子得点

バリマックス回転後のスケール値

住居観型	項目	第 1 軸	第 2 軸	第 3 軸	第 4 軸
ねぐら	雨 露	-0.099	-1.091	0.384	-0.458
しきたり	つづき 間	0.590	1.083	-0.074	-2.849
	家 相	0.830	0.132	-0.531	-1.930
みせびらかし	玄 関	1.123	0.609	-0.642	0.548
	建 築 家	0.683	-0.139	1.342	0.565
うちでも	つり あい	0.167	-0.399	0.893	-0.473
	購 入	1.247	-0.404	0.392	-0.323
あたらしがり	新 製 品	1.009	0.009	-0.710	-0.164
マイホーム主義	居 間 接 客	0.205	-0.810	1.089	-0.436
	マ イ カ ー	3.148	-0.229	0.734	1.140
合 理	必 要 室	0.274	-2.284	0.636	0.203
	装 飾 不 要	-0.020	-2.109	0.828	-0.688
自 律	個 性	0.548	0.050	2.174	0.455
	う わ さ	0.120	-0.955	1.374	0.006
社会性重視	環 境 問 題	-0.302	-0.596	1.335	-0.778
	公 営 住 宅	-0.438	-1.123	-0.827	-0.398

注：第1軸、第3軸は(+)が肯定
 第2軸、第4軸は(-)が肯定
 □印は、4軸間で一番肯定傾向の強い軸を、
 □印は、4軸間で一番肯定傾向の弱い軸を示す

〈みせびらかし型〉、〈うちでも型〉、〈あたらしがり型〉、〈マイホーム主義型〉の個人主義を示す「マイカー」項目の肯定が強い軸であり、第2軸は、〈ねぐら型〉、〈合理型〉、〈社会性重視型〉の「公営住宅」項目の肯定が強い軸である。第3軸は、〈自律型〉の2項目の肯定が強く、〈みせびらかし型〉、〈社会性重視型〉は、それぞれ2項目が肯定と否定に相反して出現している。〈マイホーム主義型〉の家庭内楽しみを示す「居間接客」の項目、〈うちでも型〉の「つりあい」項目の肯定傾向もこの軸に表われている。第4軸は、〈しきたり型〉項目の肯定が強い軸である。

これをさらに、住居観パターンとの関連でとらえるため、各パターンごとに、ここで使用した16項目の変数の平均点を示したのが図9である（これは、思うを1点、やや思うを2点、なんともいえないを3点、あまり思わないを4点、思わないを5点として計算している）。〈うちでも型〉の「つりあい」項目を除くすべての項目で、パターン間の平均値の差に有意差がみられた。各軸とその他の軸との二分割による平均値の差の検定に、5%水準までの有意差がみられる項目を示したのが表6である。第1軸のパターンは、〈みせびらかし型〉、〈うちでも型〉、〈マイホーム主義型〉の「マイカー」項目、〈しきたり型〉の項目に顕著な肯

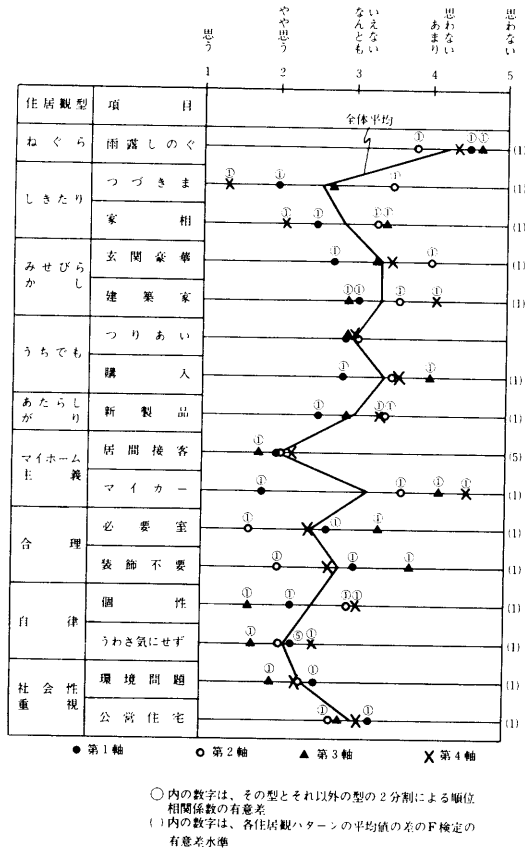


図-9 住居観パターン別住居意識欲求性向項目の平均点

定傾向を示す。これを、個人主義的対他志向型と仮称しておく。第2軸のパターンは、特に〈合理型〉の項目に顕著な肯定傾向を示す。これを合理型と仮称する。第3軸のパターンは、特に〈自律型〉と〈社会性重視型〉の「環境問題」の項目に顕著な肯定の傾向を示す。これを社会性重視志向自律型と仮称する。第4軸のパターンは、特に〈しきたり型〉の項目に顕著な肯定傾向を示す。これをしきたり型と仮称する。

以上のように、Qモード因子分析の結果抽出された住居観パターンの結果は、仮説で設定した9種類の住居観型が、大都市近郊のニュータウンにおいては、価値意識がこのような複合化されて構成されていることを示している。また、この高蔵寺ニュータウン居住者層の住居観型は、著者が、先に調査した、三重県四日市市の笹川公団賃貸集合住宅居住者層のそれとよく似たクラスターである。^{注4)}

各住居観パターンの構成比は、表4で先に示したように、合理型が集合住宅居住者層に特に多い。個人主義的対他志向型、社会性重視志向自律型は戸建住宅居住者層に多く、しきたり型には、大きな差はみられなかった。このことから、住居観は、住宅階層によって違いがあるといえる。

表 6 各軸別の肯定項目と否定項目

	第 1 軸	第 2 軸	第 3 軸	第 4 軸
肯定項目	つづきま (しきたり型) 家相 (しきたり型) 玄関 (みせびらかし型) 建築家 (みせびらかし型) 購入 (うちでも型) 新製品 (あたらしがり型) マイカー (マイホーム主義型) 個性 (自律型)	雨露 (ねぐら型) 必要室 (合理型) 装飾不要 (合理型) 公営住宅 (社会性重視型)	建築家 (みせびらかし型) 居間接客 (マイホーム主義型) 個性 (自律型) うわさ (自律型) 環境問題 (社会性重視型)	つづき間 (しきたり型) 家相 (しきたり型)
否定項目	雨露 (ねぐら型) 必要室 (合理型) 装飾不要 (合理型) うわさ (自律型) 環境問題 (社会性重視型) 公営住宅 (社会性重視型)	つづきま (しきたり型) 家相 (しきたり型) 玄関 (みせびらかし型) 建築家 (みせびらかし型) 新製品 (あたらしがり型) マイカー (マイホーム主義型) 個性 (自律型)	雨露 (ねぐら型) 家相 (しきたり型) 購入 (うちでも型) マイカー (マイホーム主義型) 必要室 (合理型) 装飾不要 (合理型)	建築家 (みせびらかし型) 新製品 (あたらしがり型) マイカー (マイホーム主義型) 個性 (自律型) うわさ (自律型)

(注) 絶対的肯定あるいは否定を示しているのではなく、4軸間の比較の上での傾向である。

3-4. 各住居観パターン別に見る住意識の特徴

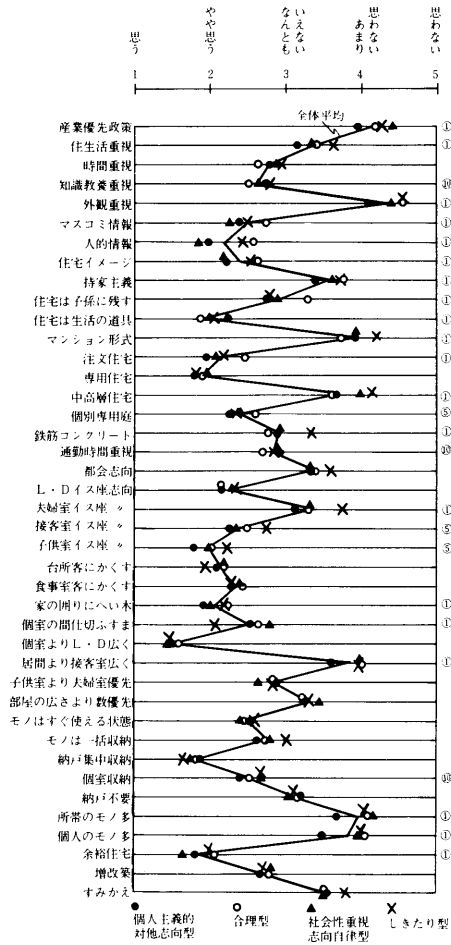
先に、各住居観パターンの価値意識の特徴について検討したが、ここでは、「住」に関する諸側面についての志向の特徴について検討を加える。表7に、その住意見の項目を示し、各住居観パターン別の住意見項目の平均点を図10に示した。

表7. 住意見項目

(政策)	・経済成長と直結しない公園、下水道や住宅優先の政策よりも、経済成長と直結する工業地、港湾、幹線道路優先の政策を選びたい。 〈産業優先政策〉
住生活重視	・衣食住の中で、住生活を最も重視したい。 〈住生活重視〉
物質と精神	・お金を得るよりも、自由に使える時間を持ちたい。 ・衣食住等の物品にお金をかけるより、知識・教養を身につけることにお金をかけたい。 〈時間重視〉 〈知識・教養重視〉
外観重視	・住宅は、間取りよりも外観を重視したい。 〈外観重視〉
住宅の関心の心	・住宅雑誌、広告、パンフレット等をよく見るほうである。 ・知人・友人宅の家具、インテリア、住宅に興味をもって見るほうである。 ・住んでみたい家の外観や間取についてのイメージをはっきりもっている。 〈マスコミ情報〉 〈人的情報〉 〈住宅イメージ〉
住宅の所有意識	・住宅は、何を犠牲にしても持家にしたい。 ・住宅は、一生使えて子孫にまで残せるものになりたい。 ・住宅は、財産としての意識よりも、使うことに意義がある一種の生活の道具と考えたい。 〈持家主義〉 〈子孫に残す〉 〈生活道具〉
(住宅形式)	・住宅の形式は、一戸建よりも設備のととのったマンション形式にしたい。 ・住宅は、面倒な手間が省ける建売住宅やプレハブ住宅よりもたとえ借金しても自分の思うように設計できる注文住宅にしたい。 ・仕事の場と住まいが続いている住宅よりも、仕事の場と住まいが切り離されている住宅にしたい。 ・低層住宅よりも、土地を有効に利用でき、コストが安くつく中・高層住宅に住みたい。 ・たとえ家が狭くなっても、個別専用の庭をもちたい。 ・住宅は木造よりも、火災や地震に強い鉄筋コンクリートにしたい。 〈マンション形式〉 〈注文住宅〉 〈専用住宅〉 〈中・高層住宅〉 〈個別専用庭〉 〈鉄筋コンクリート〉
住宅の立地条件	・住宅自体の広さや質よりも通勤時間が少なくすむことを重視したい。 ・住宅は、田園などの自然環境よりも都会の便利さの方を選びたい。 〈通勤時間重視〉 〈都会志向〉
(起居様式)	・食事室や居間は、ユカ座式(畳・床にすわって行為を行う)よりも、イス座式(イス・ベッドを使って行為を行う)にしたい。 ・夫婦寝室は、ユカ座式よりもイス座式にしたい。 ・接客室は、ユカ座式よりもイス座式にしたい。 ・子供部屋は、ユカ座式よりもイス座式にしたい。 〈L・Dイス座志向〉 〈夫婦室イス座志向〉 〈接客室イス座志向〉 〈子供室イス座志向〉
プライバシー意識	・台所は、客に見えないようにしたい。 ・食事室は、客に見えないようにしたい。 ・家の周囲は、外から見られないように、塀を作ったり木を植えたい。 ・個室と個室の間仕切りは、いざという時に続き間にできるふすまにしたい。 〈台所客にかくす〉 〈食事室客にかくす〉 〈家の囲りにへい木〉 〈個室の間仕切りふすま〉
(空間の重視傾向)	・もし余裕があるとすれば、個人個人の部屋を広くするより家族の集まる居間・食事室を広くとりたい。 ・居間よりも接客室を広くとりたい。 ・もし部屋数に制限があるとすれば、子供の個室より、まず夫婦の寝室を確保したい。 ・もし面積に制限があるとすれば、たとえ部屋が狭くなっても部屋数を確保したい。 〈個室よりL・D広く〉 〈居間より接客室広く〉 〈子供室より夫婦室優先〉 〈部屋の広さより数優先〉
(収納)	・よく使うものは、きちんと片づいていなくても、すぐ使える状態にしたい。 ・個人の衣類などは、個人個人の部屋に収納するよりも、家事をする人が洗濯後の収納に便利のように、一括して収納したい。 ・個人の持ち物でも、季節外の物やあまり使わない大きな物は、個人個人の部屋に収納するよりも、納戸等に集中して収納したい。 ・各部屋が狭くなっても、各部屋に十分収納空間を取りたい。 ・各部屋に十分収納空間があれば、納戸は必要ない。 〈すぐ使える状態〉 〈一括収納〉 〈納戸集中収納〉 〈個室収納〉 〈納戸不要〉
モノ所有	・所帯の家具や道具は、できるだけ多く持ちたい。 ・個人の衣類や持ち物は、できるだけ多く持ちたい。 〈所帯のモノ多〉 〈個人のモノ多〉
家族変化に対する空間の対応	・現在の生活にぴったりマッチしなくても、家族員の人数増加や成長に対応できるような余裕のある住宅にしたい。 ・家族員の人数の増加や成長には、増改築で対応したい。 ・家族員の人数の増加や成長には、住宅を住みかえることで対応したい。 〈余裕住宅〉 〈増改築〉 〈すみかえ〉

(注) : < > 内は項目の略省名、以下この略省名を用いる。

住居観に関する研究



注：○内の数字は、住居観パターン別平均点の差（t検定）の有意水準

図-10 住居観パターン別意見平均点

① 個人主義的対他志向型

特に所有意識に顕著な特徴を示しており、持家要求と、住宅の財産的側面に対する重視度は他のパターンより大きい。この傾向は、モノ所有にも現われており、世帯用のモノ、個人用のモノとも所有要求は強い。さらに、高質な住宅への志向も強く、衣・食生活よりも住生活の重視、注文住宅志向へとつながっている。しかし、その重視の方向は、住宅の外観重視であり、接客室重視である。プライバシー意識も対社会的なものであり、家の囲りにへい・木を囲う志向となっている。住宅に対する関心も強いが、住宅雑誌等のマスコミ情報よりも、知人・友人宅からの人的情報の方に、より関心が強いといえる。起居様式は、私室も接客室もイス座志向を示している。しかし、特に機能が要求される居間・食事室については他の住居観パターンと較べてその差がほとんどなく、このパターンのイス座志向の目的は、機能性の側面以外の部分にあると考えられる。このように、「住」の諸側面に、個人主義的で対他意識の強い特徴が現われている。

② 合理型

このパターンは、個人主義的対他志向型とは、相反する特徴を持つ。まず住宅の所有意識については、持家志向が弱く、住宅を子孫に残す家制度とつながる考え方も否定しており、住宅は生活のための道具であるという使用主義の考え方をもっている。同様に、モノ所有の要求も弱い。住宅に対する関心も弱く、マスコミ情報、人的情報ともにそれに対する興味は薄く、住みたい住宅のイメージも他の住居観パターンと較べてあまり明確でない。住宅の質に対する要求は弱く、注文住宅、個別専用庭要求の弱さとなっている。これは、一戸建住宅や、低層住宅志向の弱さとも関連をもち、さらに、住宅の質よりも通勤時間の短縮の方を重視する傾向にもみられる。このように、一貫して物質に対する要求は弱いのが、逆に、金銭より時間重視、モノより知識・教養重視の傾向が、わずかながらみられる。これら一連の使用主義志向、機能性重視志向は、接客室重視の否定や、対社会的プライバシー意識を示す家の囲りにへい・木を囲う志向の弱さにも現われている。

③ 社会性重視志向自律型

このパターンに特に強く現われている特徴は、住宅に対する関心の強さである。マスコミ情報、人的情報ともに強い関心を持ち、住みたい住宅のイメージも明確である。また、政府の政策に対しては、産業優先政策よりも、生活優先政策を重視する志向が強い。プライバシー意識については、個室の間仕切をふすまにする志向は弱く、他のパターンより私室の確立に対する要求は強いといえよう。家族変化に対する空間の対応は、余裕のある住宅を志向するが、世帯のモノ所有要求は弱い。

④ しきたり型

このパターンの特徴は、住宅形式に対する志向に特に現われており、集合住宅、中高層住宅、鉄筋コンクリート住宅の否定傾向は強い。起居様式も私室、接客室ともに、ユカ座を志向しており、行事・儀式の時のために、個室の間仕切は、ふすまがよいとしている。また、衣食住生活の中で、住生活を重視する志向は弱く、外観重視志向も弱い。このように、一貫して「近代化」「洋風化」を否定して在来の住宅形式を志向しており、伝統的規範にさえあえば住宅の質は問題にしないパターンであるといえる。

各住居観パターン別にそれぞれ「住」の諸側面に対する志向をみてきたが、その志向の傾向は、住居観に規定され、その性格に沿ったものであることが理解できよう。逆にいえば、居住者の住居観パターンを知ることにより、その居住者の「住」に関する考え方が推測可能となるといえる。このことから、ここで抽出した住居観パターンの妥当性と、住居観をとりあげる意義を理解できよう。

4. 住意識における欲求性向と社会性向の関連

住意識は、個人的な欲求としての反応と社会的規範としての反応とは、当然違いが現われると考えられる。そこで、同一質問内容を、個人的欲求性向（……したい）と社会的規範性向（……すべき）の二通りで調査し、その相異について検討を加えた。とりあげたのは、住居観パターンを抽出する際に用いた16項目の中の〈ねぐら型〉の項目を除いた15項目である。同一内容項目の欲求性向項目と社会性向項目間の相関係数と、平均値の差について検討を加える。

表8に欲求性向項目と社会性向項目間の相関係数を示した。すべての項目について、その

表8 住居観パターン別欲求性向項目と社会性向項目の相関係数

順位	全 体	個 人 主 義 的 対 他 志 向 型	合 理 型	社 会 性 重 視 志 向 自 律 型	し き た り 型
1	つりあい (0.8192)	つりあい (0.8504)	つりあい (0.8541)	公営住宅 (0.7943)	購 入 (0.8272)
2	購 入 (0.7985)	購 入 (0.8097)	公営住宅 (0.8406)	つりあい (0.7565)	建 築 家 (0.8192)
3	公営住宅 (0.7929)	公営住宅 (0.7497)	家 相 (0.8058)	家 相 (0.7336)	公営住宅 (0.7586)
4	家 相 (0.7851)	家 相 (0.7431)	購 入 (0.7713)	装飾不要 (0.7194)	装飾不要 (0.7552)
5	装飾不要 (0.7333)	装飾不要 (0.7104)	玄 関 (0.7687)	環境問題 (0.6997)	居間接客 (0.7295)
6	玄 関 (0.7150)	建 築 家 (0.6861)	建 築 家 (0.7185)	つづきま (0.6944)	家 相 (0.7068)
7	建 築 家 (0.6861)	玄 関 (0.6745)	環境問題 (0.7026)	購 入 (0.6800)	個 性 (0.6883)
8	マイカー (0.6805)	必 要 室 (0.6312)	個 性 (0.6956)	マイカー (0.6776)	マイカー (0.6860)
9	環境問題 (0.6793)	環境問題 (0.6276)	マイカー (0.6806)	必 要 室 (0.6758)	環境問題 (0.6834)
10	つづきま (0.6726)	う わ さ (0.6085)	う わ さ (0.6760)	居間接客 (0.6004)	玄 関 (0.6746)
11	必 要 室 (0.6444)	居間接客 (0.5890)	居間接客 (0.6508)	玄 関 (0.5965)	必 要 室 (0.6570)
12	居間接客 (0.6320)	つづきま (0.5814)	つづきま (0.6291)	建 築 家 (0.5732)	う わ さ (0.6360)
13	う わ さ (0.6199)	個 性 (0.5492)	装飾不要 (0.6105)	う わ さ (0.5191)	つりあい (0.6121)
14	個 性 (0.6116)	新 製 品 (0.4926)	必 要 室 (0.4451)	新 製 品 (0.4519)	新 製 品 (0.3786)
15	新 製 品 (0.4759)	マイカー (0.3686)	新 製 品 (0.4250)	個 性 (0.3350)	つづきま (0.3460)

()の数字は、ピアソン積率相関係数

相関係数は1%水準で有意な相関がみられた。全体では、〈うちでも型〉の2項目、「公営住宅」「家相」項目の相関係数は特に高く、逆に、〈自律型〉、〈あたりしがり型〉の項目は、相対的に低くなっている。前者は、対社会的関連の強い項目であり、後者は、個人的内容の項目である。つまり、他に対する適応・追従(〈うちでも型〉項目)、あるいは社会的規範(「家相」項目)、あるいは項目の内容自体が社会的問題(「公営住宅」項目)であるというように、なんらかの形で、社会との関連のある項目は、欲求性向と社会性向が、同一化しやすいと考えられる。しかし、個性や主体性という個人の主義・原理に関わる〈自律型〉の項目や、それ自体としては個人の趣味性を現わす〈あたりしがり型〉の項目は、欲求性向と社会性向のギャップが生じやすいといえる。次に各住居観パターン別にみると、先の傾向に加えて、それぞれのパターンにおいて、欲求性向項目において肯定が強い項目は、その相関係数が低くなる傾向がみられる。たとえば、個人主義的対他志向型における「マイカー」項目、合理型における「装飾不要」「必要室」の項目、社会性重視志向自律型における「うわさ」「個性」「建築家」の項目、しきたり型における「つづきま」の項目がそれである。

このことをさらに検討するため、欲求性向項目と社会性向項目の平均点を図11に示す。一般的に、〈社会性重視型〉の項目を除いて、欲求性向項目が肯定寄りにあり、社会性向項目は否定寄りになっている。この両者の平均点の差を示したのが図12と表9である。ここでも、先に相関係数で得た結果と同様の傾向がみられる。つまり、全体では、「つりあい」「購入」「家相」「公営住宅」の項目は、平均点の差が小さく、同一性がみられ、「新製品」「個性」項目はその差が大きくなっている。また、各住居観パターン別でみると、個人主義的対他志向型では、「マイカー」項目、合理型では「必要室」「装飾不要」項目、社会性重視志向自律型では「個性」「うわさ」「建築家」項目、しきたり型では「つづきま」「家相」項目で、平均点の差が大きく、欲求性向と社会性向にギャップがみられる。このギャップが生じる原因は、欲求性向項目が肯定寄りに傾く項目に限られているように、欲求性向が肯定に傾くほどには、社会性向が傾きにくいことによっていると考えられる。しかも、ギャップが大きく開く項目

は、先にみた社会的関連をもたない項目に限られている。

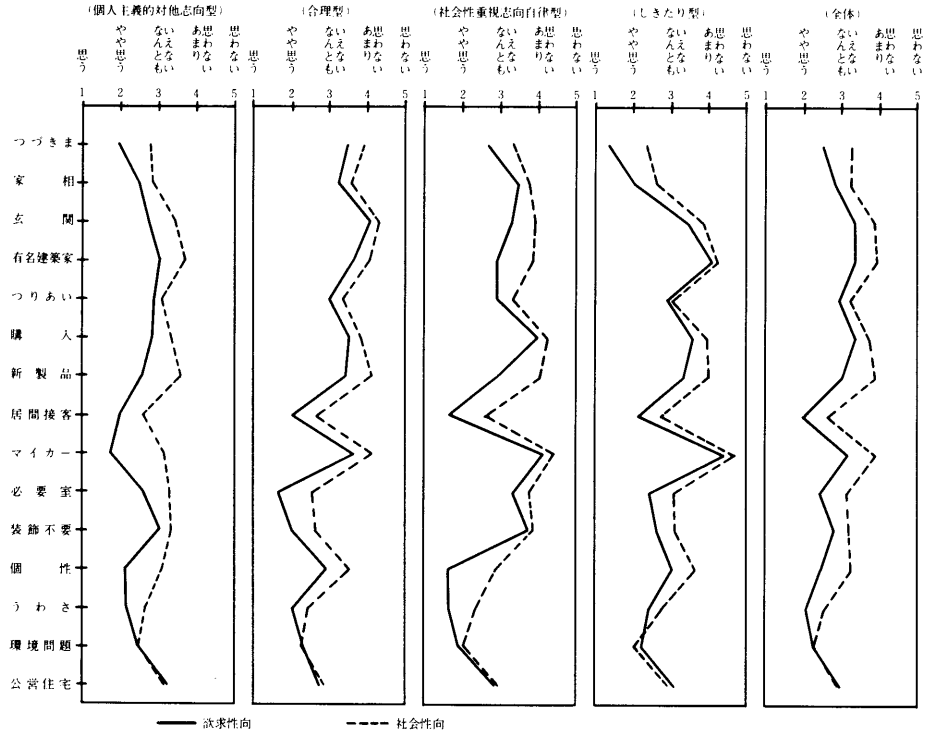


図-11 住居観パターン別欲求性向項目と社会性向項目の平均点

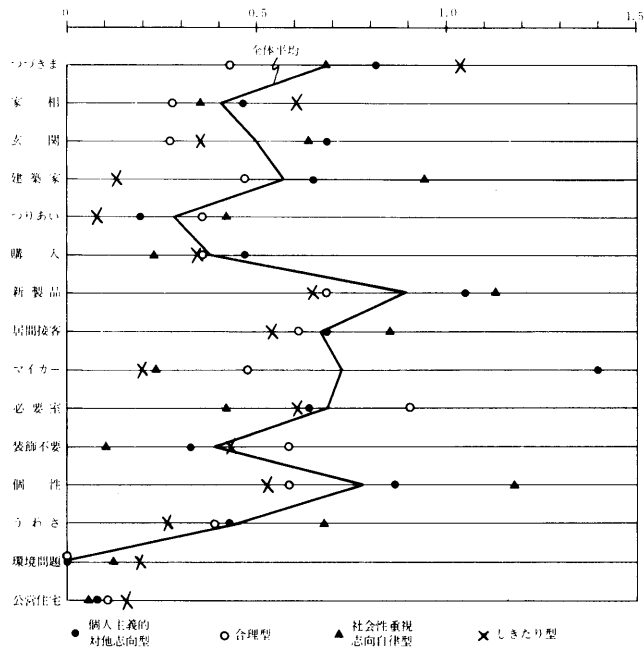


図-12 住居観パターン別欲求性向項目と社会性向項目の平均点の差

表9. 住居観パターン別欲求性向項目と社会性向項目の平均点の差

順位	全 体	個 人 主 義 的 合 理 型	合 理 型	社 会 性 重 視 型	し き た り 型
1	環境問題 (0.0003)	環境問題 (0.0038)	環境問題 (0.0036)	公営住宅 (0.0540)	つりあい (0.0780)
2	公営住宅 (0.0063)	公営住宅 (0.0786)	公営住宅 (0.1046)	装飾不要 (0.1028)	建築家 (0.1279)
3	つりあい (0.2748)	つりあい (0.1925)	玄 関 (0.2715)	環境問題 (0.1229)	公営住宅 (0.1616)
4	購 入 (0.3697)	装飾不要 (0.3267)	家 相 (0.2799)	購 入 (0.2279)	環境問題 (0.1926)
5	装飾不要 (0.3872)	う わ さ (0.4265)	購 入 (0.3549)	マイカー (0.2336)	マイカー (0.1986)
6	家 相 (0.4031)	家 相 (0.4626)	つりあい (0.3553)	家 相 (0.3512)	う わ さ (0.2648)
7	う わ さ (0.4381)	購 入 (0.4689)	う わ さ (0.3890)	必要室 (0.4185)	購 入 (0.3440)
8	玄 関 (0.4967)	必要室 (0.6389)	つづきま (0.4264)	つりあい (0.4220)	玄 関 (0.3520)
9	建 築 家 (0.5694)	建 築 家 (0.6495)	建 築 家 (0.4671)	玄 関 (0.6353)	装飾不要 (0.4331)
10	居間接客 (0.6710)	居間接客 (0.6851)	マイカー (0.4803)	う わ さ (0.6793)	個 性 (0.5290)
11	必要室 (0.6852)	玄 関 (0.6852)	個 性 (0.5842)	つづきま (0.6830)	居間接客 (0.5371)
12	つづきま (0.7049)	つづきま (0.8159)	装飾不要 (0.5868)	居間接客 (0.8488)	家 相 (0.5542)
13	マイカー (0.7222)	個 性 (0.8667)	居間接客 (0.6117)	建 築 家 (0.9414)	心 要 室 (0.6077)
14	個 性 (0.7820)	新 製 品 (1.0530)	新 製 品 (0.6837)	新 製 品 (1.1259)	新 製 品 (0.6467)
15	新 製 品 (0.8941)	マイカー (1.3984)	必要室 (0.9063)	個 性 (1.1813)	つづきま (1.0392)

5. 住居観パターンと住評価の意識構造

前節まで、仮定的、客観的立場での応答である住意見を扱って住居観パターンとの関連をとらえてきた。また、住居観パターンと住み方との関連については、すでにその実証を終えている。^{注5)} 本節では、応答者と直接的利害関係のある現実の住空間に対しての応答である住評価について検討する。この段階における住居観パターンとの関連をとらえて、住居観パターンの妥当性と意義を確認しようとするものである。本節では、住評価の対象である住空間が同一の集合住宅居住者に限定して述べる。図13は、住居観パターン別の住評価25項目の平均点を示した（満足を1点、やや満足を2点、なんともいえないを3点、やや不満を4点、不満を5点として点数を与えた）。純粋な価値意識を表現する住意見の場合と較べて、現実枠にしばられた住評価では、住居観パターンによる差は、さほど顕著には現われていない。全体的に合理型は、住空間の広さに関する項目に対し評価が良く、逆に社会性重視志向自律型では悪くなっている。しかし、住居観パターンにより、家族の人的条件が同一でないため、これだけでは結論はくだせない。そこで、住評価の本来の構造をとらえるため、住宅全体に対する評価と部分評価の関連をとらえ、全体評価に関連の強い項目、いいかえれば重視する項目と、全体評価と関連の弱い非重視項目を検討する。表10に示したのが、全体評価と部分評価との相関係数である。まず、個人主義的対他志向型は、個室の広さ、個室の独立性といった私室関係、住宅全体の間取、L・D・Kのつながりといった平面プランに関する項目は、他の住居観パターンより全体評価との関連が強く、食事室の広さ、家具配置、台所・便所・風呂の設備、災害時の安全性といった、家族室、住宅の機能性、安全性に関する項目との関連は弱い。ここで、調査の対象とした集合住宅の平面プランが3DK型であることを考えると、個室の部分が接客室、居間といった外向きの空間に使われ、食事室の部分が純粋な家族の内向き空間であることから、個室関係の相関の強さは、個室の重視というよりも、内向き空間よりも外向き空間重視の現われととらえた方が適切であろう。次に、合理型は、住戸面積、L・D・Kつながり、外観、室内インテリア、住宅の財産価値、といった空間の広さ、平面プ

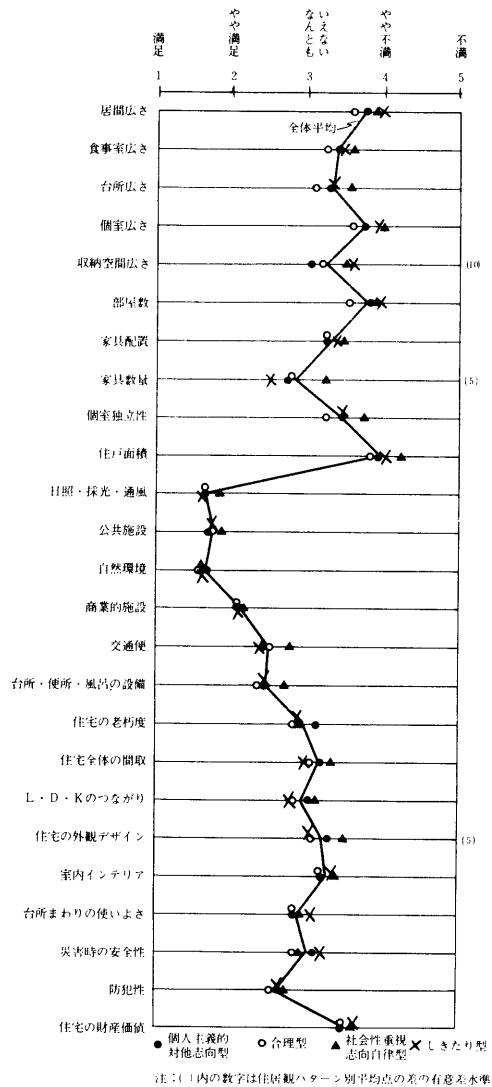


図-13 住居観パターン別住評価平均点

ラン、視覚デザイン、財産価値に関する項目と全体評価との関連は他の住居観パターンより弱い。つまり、直接住宅の機能性と関連しない項目については、あまり重視していないと考えられる。社会性重視志向自律型は、食事室の広さ、台所の広さ、家具配置、室内インテリア、L・D・Kつながり、台所まわり使いよさ、災害時安全性、防犯といった、3DK型のD-K室、視覚デザイン、住宅の安全性、機能性に関する項目と全体評価との関連が他の住居観パターンより強い。逆に、個室の広さ、収納空間の広さとの関連は弱い。しきたり型は、居間広さ、台所広さ、収納空間広さ、住戸面積、自然環境、日照・採光・通風、台所・風呂・便所の設備、住宅の財産価値といった住空間の広さ、自然環境条件、財産価値との関連が強い。しかし、住宅全体の間取、L・D・Kつながりといった平面プランや、部屋数とそれに関連する家具数量、個室の独立性との関連は弱い。つまり、空間の広さ自体が問題であり、空

表10 全体評価と部分評価の相関(集合住宅)

変数	全体		個人主義的 対他志向型		合理型		社会性重視 志向自律型		しきたり型	
	順位	係数	順位	係数	順位	係数	順位	係数	順位	係数
居間広さ	1	0.65303	1	0.66777	1	0.60883	1	0.69535	1	0.71051
食事室広さ	4	0.55370	9	0.44767	2	0.58122	2	0.68113	4	0.57380
台所広さ	7	0.50119	7	0.47011	9	0.46339	5	0.56615	3	0.58933
個室広さ	5	0.54112	3	0.61350	5	0.51628	12	0.44418	6	0.52744
収納空間広さ	10	0.42665	12	0.40205	10	0.44828	16	0.37046	5	0.55417
部屋数	2	0.57723	4	0.60841	3	0.56613	4	0.58980	8	0.49919
家具配置	9	0.46393	11	0.41297	11	0.44213	3	0.59933	9	0.47555
家具数量	15	0.36023	13	0.37234	7	0.49300	20	0.27397	25	0.00458
個室独立性	6	0.53822	5	0.59482	4	0.51719	9	0.51942	10	0.46588
住戸面積	3	0.55678	6	0.59050	8	0.48347	6	0.55310	2	0.68253
日照・採光・通風	20	0.24998	20	0.26892	21	0.16766	19	0.28833	13	0.40172
公共施設	23	0.13528	24	0.09764	20	0.17430	24	0.13046	22	0.10686
自然環境	21	0.22689	19	0.28246	25	0.10017	18	0.29519	16	0.33615
商業的施設	22	0.17750	21	0.21669	24	0.10954	22	0.20692	19	0.23349
交通便	25	0.11099	23	0.11883	22	0.15220	25	0.07283	24	0.01167
台所・便所・風呂の設備	14	0.38529	16	0.33963	13	0.40690	15	0.37207	11	0.44216
住宅の老朽度	17	0.34545	18	0.31475	16	0.30986	13	0.43910	14	0.38833
住宅全体の間取	8	0.49617	2	0.62131	6	0.51053	11	0.45334	21	0.17166
L・D・Kつながり	12	0.41151	8	0.46920	14	0.36723	8	0.52096	20	0.21839
住宅の外観デザイン	18	0.27552	17	0.33409	19	0.20427	21	0.26625	17	0.26149
室内インテリア	11	0.42249	10	0.42119	15	0.36368	7	0.54604	12	0.42162
台所まわり使いよさ	13	0.39698	15	0.35448	12	0.41917	10	0.46709	15	0.36863
災害時安全性	19	0.25500	22	0.19255	18	0.26709	17	0.34009	18	0.24900
防犯	24	0.11856	25	0.07465	23	0.12822	23	0.18568	23	0.10421
住宅の財産価値	16	0.35641	14	0.35828	17	0.28508	14	0.37970	7	0.51145

間の質、内容は重視されていないと考えられる。

以上、住居観パターン別に、重視傾向をとらえたが、次に、住評価それぞれが、どのような関連をもってとらえられているかを検討する。そのために、各住居観パターン別に、部分評価の因子分析を行った。その結果を、表11、表12に示す。因子抽出法は、共通性の反復推定の主因子解を用い、因子数は1.0以上の固有値をもつ因子とし、最大繰返し計算回数は25回で、共通性推定値間の差が0.001以下になると計算を止める。因子の回転は、バリマックス回転を用いた。以下に抽出因子の説明を行う。

表11-1 住評価の因子分析
(集合住宅全体)

FACTOR	変 数	因子負荷量
1 (58.9)	住 戸 面 積	0.82
	個 室 広 さ	0.75
	居 間 広 さ	0.75
	部 屋 数	0.75
	個 室 独 立 性	0.62
	取 納 空 間 広 さ	0.46
	家 具 配 置	0.45
2 (17.7)	自 然 環 境	0.75
	公 共 施 設	0.75
	商 業 的 施 設	0.72
	日 照・採 光・通 風	0.48
3 (7.2)	L・D・Kつながり	0.72
	全 体 間 取	0.71
	合 所 ま わ り 使 い よ さ	0.46
4 (6.4)	外 観 デ ザ イ ン	0.45
	災 害 時 安 全 犯 罪	0.69
5 (5.2)	防 設	0.58
	台 所 広 さ	0.75
6 (4.6)	食 事 室 広 さ	0.75
	家 具 数 量	0.68
	家 具 配 置	0.56

(注) : () 内の数字は寄与率

表11-2 住評価の因子分析
(個人主義的対他志向型)

FACTOR	変 数	因子負荷量
1 (56.0)	住 戸 面 積	0.80
	部 屋 数	0.79
	居 間 広 さ	0.74
	個 室 広 さ	0.72
	個 室 独 立 性	0.64
	取 納 空 間 広 さ	0.47
	L・D・Kつながり	0.41
2 (15.3)	公 共 施 設	0.88
	自 然 環 境	0.68
	商 業 的 施 設	0.68
	日 照・採 光・通 風	0.52
3 (10.8)	全 体 間 取	0.72
	L・D・Kつながり	0.68
	外 観 デ ザ イ ン	0.47
4 (7.8)	家 具 配 置	0.75
	家 具 数 量	0.59
5 (5.4)	台 所 広 さ	0.92
	食 事 室 広 さ	0.67
6 (4.6)	災 害 時 安 全 犯 罪	0.78
	防 設	0.57
	老 朽 度	0.40

表11-3 住評価の因子分析
(合理型)

FACTOR	変 数	因子負荷量
1 (55.1)	個 室 広 さ	0.85
	住 戸 面 積	0.84
	部 屋 数	0.73
	居 間 広 さ	0.73
	個 室 独 立 性	0.59
	取 納 空 間 広 さ	0.48
	家 具 配 置	0.46
2 (20.3)	食 事 室 広 さ	0.43
	自 然 環 境	0.85
	公 共 施 設	0.79
	商 業 的 施 設	0.68
3 (8.5)	交 通 便 宜	0.52
	日 照・採 光・通 風	0.48
	外 観 デ ザ イ ン	0.63
	財 産 価 値	0.55
	全 体 間 取	0.54
	L・D・Kつながり	0.51
	イ ン テ リ ア	0.51
4 (6.9)	老 朽 度	0.46
	台 所 ま わ り 使 い よ さ	0.42
	防 犯	0.64
	災 害 時 安 全 犯 罪	0.61
5 (4.9)	設 備	0.52
	台 所 ま わ り 使 い よ さ	0.45
	L・D・Kつながり	0.41
	食 事 室 広 さ	0.81
6 (4.3)	台 所 広 さ	0.68
	家 具 数 量	0.63
	家 具 配 置	0.57
	取 納 空 間 広 さ	0.41

表11-4 住評価の因子分析
(社会性重視志向自律型)

FACTOR	変 数	因子負荷量
1 (58.9)	居 間 広 さ	0.82
	食 事 室 広 さ	0.78
	部 屋 数	0.77
	住 戸 面 積	0.75
	台 所 広 さ	0.74
	個 室 独 立 性	0.70
	家 具 配 置	0.68
	個 室 広 さ	0.60
	財 産 価 値	0.41
	2 (15.0)	イ ン テ リ ア
災 害 時 安 全 犯 罪		0.64
設 備		0.63
台 所 ま わ り 使 い よ さ		0.57
防 犯		0.52
老 朽 度		0.50
食 事 室 広 さ		0.45
台 所 広 さ		0.42
L・D・Kつながり		0.41
3 (8.8)		商 業 施 設
	公 共 施 設	0.73
	交 通 便 宜	0.63
	自 然 環 境	0.62
4 (6.5)	L・D・Kつながり	0.79
	全 体 間 取	0.75
5 (6.0)	取 納 空 間 広 さ	0.71
	外 観 デ ザ イ ン	0.57
	自 然 環 境	0.50
6 (4.9)	個 室 広 さ	0.43
	家 具 数 量	0.70
	個 室 独 立 性	0.41
	防 犯	0.40

表11-5 住評価の因子分析
(しきたり型)

FACTOR	変 数	因子負荷量	
1 (49.9)	居 間 広 さ	0.94	
	住 戸 面 積	0.78	
	個 室 広 さ	0.72	
	部 屋 数	0.69	
	食 事 室 広 さ	0.61	
	台 所 広 さ	0.61	
	個 室 独 立 性	0.54	
	取 納 空 間 広 さ	0.46	
	2 (20.6)	台 所 ま わ り 使 い よ さ	0.80
		老 朽 度	0.69
設 備		0.67	
外 観 デ ザ イ ン		0.58	
災 害 時 安 全 性		0.56	
L・D・Kつながり		0.55	
イ ン テ リ ア		0.48	
3 (10.2)	防 犯	0.48	
	イ ン テ リ ア	0.70	
	財 産 性	0.63	
	台 所 広 さ	0.54	
	食 事 室 広 さ	0.52	
4 (7.6)	日 照・採 光・通 風	0.50	
	交 通 便 宜	0.70	
	商 業 的 施 設	0.68	
	L・D・Kつながり	0.58	
5 (6.0)	全 体 間 取	0.54	
	自 然 環 境	0.75	
6 (5.6)	商 業 的 施 設	0.57	
	公 共 施 設	0.56	
	個 室 独 立 性	0.78	
	家 具 数 量	0.49	

表-12 住評価の因子分析の概括

注：（ ）内の数字は寄与率（%）

FACTOR	集合住宅全体	個人主義的対他志向型	合理型	社会性重視志向自律型	しきたり型
1	住宅の広さ評価 (58.9)	住宅の広さ評価 (56.0)	住宅の広さ評価 (55.1)	住宅の広さ評価 (58.9)	住宅の広さ評価 (49.9)
2	住宅の立地条件評価 (17.7)	住宅の立地条件評価 (15.3)	住宅の立地条件評価 (20.3)	住宅の安全性、機能性とインテリア評価 (15.0)	住宅の安全性、機能性と視覚デザイン評価 (20.6)
3	平面デザインと外観デザイン評価 (7.2)	平面デザインと視覚デザイン評価 (10.8)	平面デザインと視覚デザイン評価 (8.5)	住宅の立地条件評価 (8.8)	インテリアと財産価値評価 (10.2)
4	住宅の安全性と機能性評価 (6.4)	家具評価 (7.8)	住宅の安全性と機能性評価 (6.9)	平面デザイン評価 (6.5)	社会的立地条件と平面デザイン評価 (7.6)
5	D・K室評価 (5.2)	D・K室評価 (5.4)	D・K室評価 (4.9)	収納空間と外観デザイン評価 (6.0)	自然環境条件評価 (6.0)
6	家具評価 (4.6)	住宅の安全性評価 (4.6)	家具評価 (4.3)	家具数量評価 (4.9)	個室独立性評価 (5.6)

- ① 住宅の広さ評価因子……集合住宅全体、および各住居観パターンすべての第1因子がこれであり、寄与率もかなり高い値を示している。集合住宅全体では、住宅全体広さと公・私室各室の広さ評価で形成されている。住居観パターン別にみると、個人主義的対他志向型では、この因子軸にD・K室の広さ評価が含まれていない。つまり、住空間の広さ評価をする場合、このパターンでは、D・K室広さは重視されていないか、あるいは同一次元で評価されていないと考えられる。社会性重視志向自律型としきたり型は、D・K室の広さ評価もこの因子に含まれており、住宅全体広さや個室などの広さ評価と同じ次元で評価されていると考えられる。しかし、しきたり型では、個室の独立性評価がこの因子に含まれておらず、このパターンが個室の独立性を重視していないことがここでも現われている。
- ② 住宅の立地条件評価因子……集合住宅全体、およびしきたり型を除く各住居観パターンでは、自然的立地条件と社会的立地条件がまとまってこの一つの因子を形成している。しきたり型では、社会的立地条件にくらべ、特に自然的立地条件が重視されているため、分離してそれぞれ独立因子を形成していると考えられる。
- ③ 平面デザイン評価因子……集合住宅全体、および個人主義的対他志向型では、平面デザイン評価は外観デザイン評価と同一因子を形成している。合理型では、外観および室内インテリア評価の両視覚デザイン評価、さらに住宅の財産価値評価と同一因子を形成しているが、これらはすべてこのパターンで重視されていない項目である。社会性重視志向自律型は、平

面デザイン評価だけで軸を形成している。しきたり型では、平面デザイン評価は社会的立地条件評価と同一因子を形成しており、これらは、このパターンで重視されていない項目である。

④ 住宅の安全性評価因子……集合住宅全体、および個人主義的対他志向型を除く各住居観パターンでは、災害時安全性や防犯という住宅の安全性評価は、住宅の機能性と同一因子を形成しているが、個人主義的対他志向型では、この因子に機能性評価が含まれていない。社会性重視志向自律型では、この因子に機能性評価、さらに室内インテリア評価をも含んでおり、これらはすべてこのパターンの重視項目である。

⑤ D・K室広さ評価因子……集合住宅全体、および個人主義的対他志向型、合理型では、これが独立因子を形成している。しかし、社会性重視志向自律型、しきたり型では、住宅の広さ評価因子に含まれて、独立因子を形成していない。

⑥ 家具評価因子……集合住宅全体、および個人主義的対他志向型、合理型では、家具配置と家具数量評価で独立した因子を形成する。しかし、社会性重視志向自律型では、家具配置評価は住宅の広さ因子に含まれ、家具数量評価は、むしろ個室の独立性との関連を示して別の因子を形成している。つまりこのパターンでは、家具配置評価は、家具そのものの絶対量よりも、住空間の広さとの関連の方が強く、また家具数量評価は、個室の独立性が確保されるかどうかはその評価を左右しているといえる。しきたり型では、独立因子はなく、家具数量評価は、個室の独立性評価因子の中に含まれ、これらはこのパターンにおいて重視されない項目である。

このように、住評価においても、各住居観パターンの特徴が現われていることが理解できる。これまで数多く行なわれてきている住評価の研究では、居住者の住居観パターンによってその評価はかなり異なることが考慮されていない。しかし、住評価を厳密にとらえるためには、住居観パターン別にこれをとらえる視点の導入が必要であるといえよう。

6. まとめ

本報では、まず住居観に関する用語の定義、住居観型の仮説の設定を行い、それに基づいて、実際の住居観パターンを抽出した。抽出した住居観パターンは、4パターンであり、住宅階層による違いがみられた。次にその住居観パターンの性格を分析し、その意識構造をあきらかにした。各住居観パターンの性格は、住に関する諸側面についての住意見にも、明確にその傾向が表現された。さらに、現実枠にしばられた住評価においても、各住居観パターンの性格が反映されていたが、住意見ほどにはその影響は小さく、現実枠が、住居観の影響を妨げることを指摘できる。しかし、住評価においてもその影響は否定できず、住評価研究においても、住居観の視点を導入する必要性について述べた。これらのことから、住居観型の概念を用いることによって、各個人の住居志向や意識的メカニズムを把握することが可能となること、住居観を研究する意義と本研究で抽出した住居観パターンの妥当性が実証されたと考える。また、本報では欲求性向と社会性向の関連についても検討し、社会的関連の強い項目では両者が近接し、個人的色彩の濃い項目では、ギャップが広がり、欲求性向の肯定の度合が増すほどそのギャップもさらに広がることを指摘した。このことは、調査項目作成時には、欲求性向と社会性向との区別の認識が必要であることを示しているといえる。

(なお、本研究には昭和56年度文部省科学研究費を受けている。また、統計計算には、名古屋

屋大学大型計算機センターの計算機を使用した。)

(注)

1. 住居観型の設定を行っている研究としては次のものがある。
 - ・西山卯三、扇田信：「住意識と住要求」1959、日本建築学会研究報告46号
 - ・扇田信：「住居観の研究－住意識について」1961、日本建築学会論文報告集第68号
 - ・扇田信：「住居観の研究」1961、学位論文
 - ・上林博雄他：「住生活・住宅の型展開に関する研究」1967、大阪市立大学家政学部紀要 第15巻
 - ・服部峯生他：「住要求から見た独立住宅の類型化に関する研究」1977、住宅建築研究所報
2. 西山卯三、扇田信氏では、ねぐら型、しきたり型、みせびらかし型、あたらしがり型、たのしみ型の名称が用いられ、上林博雄氏では、無関心、慣習、誇示、雷同、合理、自律、家庭天国型の名称が用いられている。服部峯生氏では、格式型、本格型、信念型、慣行型、休息型、たのしみ型の名称が用いられパターンが軸によって構成されている。
3. Qモード因子分析は、各調査対象者（ケース）間の関連性を要約するもので、ケースと因子の相関を因子負荷量で表わす。
4. 中島喜代子他：「住居観に関する実証的研究（その1）住居観と外観デザイン志向」「同（その2）住居観と平面構成志向」1982、日本建築学会近畿支部研究報告集
5. 注(4)に同じ